

字環字府

Interfaculty Initiative in
Information Studies
Graduate School of
Interdisciplinary
Information Studies
The University of Tokyo

אין סוף



ETER
Prima
Corona



number.

28

Gakkan Gakufu

Interview

GAKKAN GAKUFU

Interfaculty Initiative in Information Studies/Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, The University of Tokyo

暦本純一 教授 インタビュー

人間とコンピューターの未来をデザインする

今年度より副学環長に就任された暦本教授に、ご自身の研究とこれからのビジョンについてお聞きました。SFのなかに描かれていた世界を、次々に現実にしていくような研究の数々には、未来の芽がつまっていました。

● まず現在のご研究について教えてください

大きく言うと、コンピューターが現実の世界や人間とかかわる領域、ヒューマン・コンピューター・インタラクションの研究をしています。最近では「拡張現実感 (AR)」と呼ばれる領域でもあって、例えば眼は眼鏡をかけるとよく見えるようになりますよね。これと同じように、情報の眼鏡のようなものをつくって、「昨日会った人誰だっけ」と思った時にぱっとその人の画像が見えるようになるだとか、自分が行こうとしている方向へ矢印が見えるようになったら便利ではないかとか、人間の持つ能力をコンピューターで拡張する研究をしています。例えば、記憶の拡張。人間が一生に読める文字や一生に見る映像は、近未来のホームサーバーに全て記録することが原理的にできるようになるでしょう。蓄積されたデータをうまく検索して表示することができれば、自分の記憶がグーグルで拡張されるような、人間の記憶能力そのものが增强されるようなことが可能になります。記録、検索ができるデバイスを携帯すると、脳の後ろにコンピューターの脳がついているような、人間がある種のサイボーグになっていくようなことも実現します。

ちょっと変わった例では、人間の能力の拡張だけでなく、ペット用のライフログデバイスを開発して、人間と動物のインタラクションをコンピューターで拡張することにも取り組んでいます。自分が会社や学校へ行っている時に、家の猫が何をしているか気になりますよね。猫に小さなデバイスをつけて、その振動パターンを分析することで、猫が食事をしているのか、散歩しているのか、眠っているのかなどを自動認識して、ブログやツイッターに表示することができるようにしました。また、猫視点で記録された映像を分析すると、猫が何を考えているかがわかるのではないかと、あるいはどこの猫と会っているかがわかると、猫のソーシャルネットワークが明らかになるのではないかと考えています。そうするともっと猫と人間の関係がよくなるし、猫が扉に近づくと自動的に開くとか、嫌いな猫が近づくと知らせてくれるようになれば、猫がコンピューターを便利に使うということも、将来起こるかもしれません。



● 情報学環に赴任されて変わったことはありますか？

研究所と大学でやっていることは、本質的には変わらないと思っています。何が一番未来に対して重要なのか、根源的なのかと

いうところは外さずに追求したい。ですから、大学だからといって、あまり枠に囚われないようにしています。変わったのは、学生をとるようになったことですね。学生と接していて一番大事だと思うのは、何をやりたいか what をはっきり持つことと、ゴールを思い描く力、イメージする力が大切だということです。そのためには、SF的なアイデアとか、かなりおかしい、変なことを学生が言い出した時にはできるだけ応援する、逆に当たり前のことを言ったら叱るようにしています(笑)。

何かの専門家を名乗って、自分の枠を狭めてしまうと、学問は終わってしまいます。学問はいつもラディカルで常に自己否定していないとダメだと、個人的にはそう思ってやっています。ライフログやARは、利便性を高める反面、プライバシーの問題なども考えなければならない学際的な領域です。クリアな答えはないが、おもしろい領域。われわれは、どちらかというところ、ギーク的な姿勢で、やれるところまでやってみようと思っています。

● 「未来」が研究のキーワードになっていますね

思いつき、鉄腕アトム世代なので(笑)。初めて見た動く絵がアトムだったかもしれないくらいです。昔から、未来っぽいSFが大好きでした。SFアニメ好きのなかでも、ロボット派とサイボーグ派がいるじゃないですか。人間とは異なる人工知能が人間と共生するような未来を描くのがロボット派だとすると、どちらかというところ人間の能力を拡張して進化していくサイボーグ的な未来のほうが、ちょっと怖いおもしろいかなと思っていました。

アニメでも「ドラえもん」や「鉄腕アトム」から、最近では「攻殻機動隊」や「電脳コイル」のようにサイボーグ的な未来像が描かれるようになってきました。現実においても、だんだん人間を拡張する方向が見えてきていると思います。電子的な世界と現実の世界が融合していくと、近い将来、どこからがコンピューターでどこからが人間なのかがわからなくなってくるかもしれません。今でもインターネットを使っていると、どこからが自分で考えたこと、どこからがネットで検索したことなのかわからなくなってしまうことがありますよね。human computer interactionから、だんだんとhuman computer integration、人間とコンピューターが渾然一体となって進化していくような世界になってくるのではないのでしょうか。このような未来像が、健康維持や長寿社会などの分野にどのようにかかわっていきかということも、これから考えていきたい領域です。



筑紫哲也氏追悼シンポジウム開催

昨年11月7日に亡くなったジャーナリスト筑紫哲也さんの命日を前にして、シンポジウム「筑紫哲也との対話——没後1周年」が、11月3日、福武ホールにて、情報学環と朝日新聞社の共催で行われた。情報学環は、「ジャーナリズム研究機動中心」の活動として、生前の筑紫さんからの聞き取り調査を行っており、このシンポジウムは、その遺産を継承していく第一歩として計画されたのだった。

「政治とジャーナリズムの転換点で」と題された第1部では、石田英敬学環長の司会のもと、評論家の立花隆氏、元衆議院議員の田中秀征氏、朝日新聞編集委員の外岡秀俊氏、また急遽参加の決まった辻元清美国土交通副大臣が登壇し、筑紫さんなら、大きな変革期にある現在の国内、国外の政治状況にどう向かい合っただろう

かを語り合った。また、吉見俊哉前学環長が司会を務めた第2部「メディアとしての筑紫哲也」では、姜尚中教授、筑紫さんの次女ゆうなさん、秘書だった白石順子氏も登壇し、筑紫さんが病床で記した「残日録」が、「News23」の映像とつき合わされながら詳しく紹介された。

また、シンポジウムの最後には、筑紫さんの家族を代表して、房子夫人が謝意を述べる一コマもあった。短期間での募集にもかかわらず、会場には抽選で選ばれた人ら約200名が訪れ、大盛況のうちに幕を閉じた。(助教・西兼志)



第三回学環顧問会議開催

12月1日、第三回情報学環顧問会議(座長:長尾真国立国会図書館長)が、福武ホールラーニングスタジオにて開催された。ちょうどこの日は、中国復旦大学楊玉良学長が東大を表敬訪問中。復旦大学と学環は昨年学術交流覚書を取り交わしたばかりであることから、学環にも足を運んでいただき、冒頭、特別にあいさつの言葉をいただいた。さらに、濱田純一元情報学環長・現東大総長も臨席。来校された9人の顧問の方々へあいさつの言葉を述べた。

その後、学環の教員が、この一年の学環の仕事ならびに将来の

研究・教育活動の展望を説明した。今回の会議では、「現代社会の課題に奉仕する開かれた学環を」という強いメッセージをいただいた。また、教員の説明が一部専門的過ぎるという意見や、質疑応答の時間が足りなかったことなどが、来年以降の会議の課題となった。学環は来年創立10周年を迎える。教員・職員一同、数々のご助言を運営に生かすよう、意を新たにしたい会議だった。(教授・林香里)



東京大学 第11回 制作展 iii Exhibition 11 開催



12月3日から8日にかけて、学生によるメディアアートの展覧会が開催された。本展覧会は、芸術と科学技術とが融合した新しい表現を学生自らの手で発信すると共に、展覧会の企画・運営を含めたプロデュースを目的とし、学際情報学府の授業の一環として行われている。第11回では「夢 見ていますか」をテーマとし、作品だけでなく会場を含めた全体としての展覧会を目指し、夏に行った制作展“iii Exhibition Extra 2009”の2倍以上の作品数・規模で開催された。

今回は、学生主導による新しい試みを数多く導入し、広く一般の方々に楽しんでいただけるような作品も用意した。4つの会場を通して、多くの来場者を迎え最後まで活気のある展覧会となった。来年度の制作展も、夏と冬の合計2回の開催を予定している。詳細はWebサイト(<http://i3e.iii.u-tokyo.ac.jp/>)にて。(須藤研M1・柳瀬一貴)

今回は、学生主導による新しい試みを数多く導入し、広く一般の方々に楽しんでいただけるような作品も用意した。4つの会場を通して、多くの来場者を迎え最後まで活気のある展覧会となった。来年度の制作展も、夏と冬の合計2回の開催を予定している。詳細はWebサイト(<http://i3e.iii.u-tokyo.ac.jp/>)にて。(須藤研M1・柳瀬一貴)

60年の時を超えて灯る～門灯復元

情報学環本館が入る図書館棟は、昭和3年に内田祥三先生(第14代総長)の設計によって建てられたキャンパスを代表する名建築である。しかし第二次世界大戦中、各入口に取り付けられていた門灯はすべて軍への金属供出を理由に剥がされ、それから60年以上も、そのままの姿で時を過ごすことになった。

08年度末から、この棟に入る附属図書館、社会科学研究所、史料編纂所と大学院情報学環の4部局は大学本部の協力のもと門灯復元を目指してきたが、2009年12月、多くの企業、卒業生、教職員、教職員OBなど多数の方々からの支援を得て、当時のデザインのままの復元が実現した。

これを記念し、12月22日夕刻、図書館正面玄関前で披露・点灯式が開催された。この日は冬至。お天気には恵まれたが冬本番の夕暮れ時、寄付者の方々や濱田総長始め多くの関係者が見守る中、新しく取り付けられた門灯(ポーチ外灯)に灯りが灯され、この名建築は60年ぶりに暖かなやさしい光によってライトアップされた。



International Academic Exchange: Old Friends and New Partners

The 2009 UT-SNU-CUHK-ANU Symposium



On October 29-30, the Graduate School of Interdisciplinary Information Studies at the University of Tokyo hosted an annual academic symposium on media and communications in Asia that brought together scholars and students from the Asia-Pacific region. The symposium, entitled "Mapping the Spaces of Media Culture in Asia: Information, Communication and Politics" was held for the first time in the new Fukutake Hall Theater. Composed of nine panels and 24 presenters, the symposium examined the role of media in shaping political discourse.

In addition to 18 graduate students and four faculty presenters from the Graduate School of Interdisciplinary Information Studies at the University of Tokyo (UT) and the Department of Communication at Seoul National University (SNU), Professor Tessa Morris Suzuki of Australian National University (ANU) and Professor Chin-Chuan Lee of City University of Hong Kong (CUHK) presented as guest speakers. The panels and presentations highlighted the important role of media in our rapidly changing world. The symposium originated from a bi-lateral academic exchange agreement between the Graduate School of Interdisciplinary Information Studies (formerly, Institute of Socio-Information and Communication Studies) at the University of Tokyo and the Department of Communication Studies at Seoul

National University. Since 1995, the University of Tokyo and Seoul National University have alternated hosting the annual symposium.

National University. Since 1995, the University of Tokyo and Seoul National University have alternated hosting the annual symposium.

New Academic Exchange Agreements

The Interfaculty Initiative in Information Studies has signed new academic exchange agreements with the College of Asia and the Pacific at the Australian National University, and the Department of Media and Communication at the City University of Hong Kong.



On October 29th, Dean Ishida Hidetaka exchanged the formal agreements with Professor Tessa Morris-Suzuki, representing the Australian National University, and Professor Chin-Chuan Lee, on behalf of the City University of Hong Kong, during a signing ceremony held in Fukutake Hall. The agreements pledge to promote future academic exchange, including the exchange of faculty and students, and cooperation in research and education. The new agreements are modeled on the long-running and highly successful exchange agreement with the Department of Communication at Seoul National University.



(Associate Professor Jason G.Karlin)

Symposium

シンポジウム「闘いとしての政治／信念としての政治」

12月14日、元自民党幹事長の野中広務氏を迎え、シンポジウム「闘いとしての政治／信念としての政治」が、情報学環主催、毎日新聞社・NHK出版の後援により、福武ラーニングシアターで開催された。

まず、野中氏による基調講演では、被差別部落に生まれた少年時代、反戦の志を抱いた終戦期、差別を機に政治の道へ進み、重度障害者療養施設を設立・運営しながら国会議員を務められたこれまでの歩みと自らの信念が語られた。

続いて、ドキュメンタリー作家の森達也氏、姜尚中教授、北田暁大

准教授を交えたディスカッションが行われた。セッション1「政治と信念」では、政治にとって信念、権力、保守、平和とは何かが改めて問われた。セッション2「社会と正義」では、差別とメディア、危機管理などの問題を通して、治者としての論理と少数者としての論理との葛藤が浮き彫りにされた。

会場は満員の観客で埋めつくされ、シンポジウムは大盛況のうちに幕を閉じた。





情報学環ホームカミングデー

11月の恒例行事となったホームカミングデー。11月14日、情報学環は福武ホールで講演会を開催した。登壇者は二人で、最初は前田准教授が「政権交代と世論」と題して過去4年間の世論について解説した。次に、「世界の裁判員」(日本評論社、2009年)の著者である教育部OBの神谷説子記者(ジャパントイムズ)が「世界と日本の裁判員」と題して、各国の制度を概観すると同時に、日本の裁判員制度の意義を論じた。終了後の懇親会は、教育部修了生による就職相談会を兼ね、70名前後が参加し旧交を温めた。(准教授・前田幸男)

続報

「メディア・アートとは何か？」



情報学環と東京藝大映像研究科が展開中の連続シンポジウム《メディア・アートとは何か?》。第2回は「メディア・アートという前衛」(9月26日@藝大横浜校地)、第3回は「クリティクスの再生のために」(10月10日@福武ホール)、第4回は「記号論で読み解くメディア・アート入門」(11月28日@NTTインターコミュニケーション・センター)が開催され、メディア・アーティストの実践とメディア・アート作品の分析を結ぶ回路が築かれた。

そして、第5回(12月19日@福武ホール)は「ハイパー産業時代の創造と批評」と題し、哲学者ベルナルド・ステイグレル氏を招聘して、技術や芸術、感性をめぐる対話から批評の再生可能性へ向けた討議が試みられ、大好評を博した。(石田研D4・中路武士)

メディア研究のつどい 新聞社とNPOの「協働」を考える

10月7日、公開セミナー「メディア研究のつどい」(林研究室主宰、電通コミュニケーション・ダイナミクス寄付講座)が本郷キャンパスで開催され、新聞社とNPOによる協働メディア実践についての事例報告が行われた。講師は、新潟県上越市の地域紙『上越タイムス』の山田護編集長と特定非常利活動法人くびき野NPOサポートセンターの秋山三枝子理事長の2人。

山田氏は、休刊目前であった同紙がNPOに紙面制作を依頼した理由と効果を説明。秋山氏は、紙面を活用して地域の市民活動を活発にさせた10年間の歩みを報告した。同紙はこの協働実践を通して発行部数を4倍に伸ばしたこともあり、新聞業界の関係者も多数詰め掛けた。(林研D3・畑仲哲雄)

「メディアと多元性」プロジェクト 公開講座「私が見た被差別部落、メディア、日本」開催

11月11日、工学部2号館にて、「メディアと多元性(ダイバーシティ)」プロジェクト公開講座「私が見た被差別部落、メディア、日本」が、林香里研究室主催で行われた。本プロジェクトは、今後の日本のメディアや日本社会の多元性について考えていく場として、2009年10月に発足したものである。今回は、講師としてノンフィクションラ

イターの角岡伸彦氏を迎え、日本の被差別部落問題と、それに対するマスメディアの報道姿勢の問題、また被差別部落問題の未来について、ご講演いただいた。当日は学内外からの多くの参加者で教室が満員となり、角岡氏のウイットに富んだ講演を受けて、参加者との間でも活発な議論がなされた。(林研M2・根津弥)

留学生バス旅行

数多くの留学生が在籍している学際情報学府では、ほぼ毎年留学生向けにイベントを企画しており、今年度は11月15日に日光への日帰りバス旅行を実施した。当日は好天に恵まれ、修士、博士、研究生合わせて54名の留学生が晩秋の日光(日光東照宮、中禅寺湖、華厳の滝)を各々大いに楽しんだ様子で、留学生同士の親睦を深めると同時に、日頃勉学に忙しい留学生がリフレッシュする良い機会となったようだった。(学務係)



3/5~7「MELL EXPO 2010」開催!

今年もやります! 「メル・ブラッツ」は、内外からメディア表現、リテラシーの実践・研究を集結した「MELL EXPO(メル・エキスポ)2010」を開催します。詳しくは下記Webページをご参照ください。(教授・水越伸)

■日程:2010年3月5~7日(金~日)
■会場:東京大学大学院情報学環 福武ホール <http://www.mellplatz.net/>

受賞報告

■芸術科学会最優秀論文賞受賞

岸遠(苗村研・M2)が、エンタテインメントコンピューティング2009において、「光で制御する残像ディスプレイ SteganoScanの提案」と題した発表を行い、芸術科学会最優秀論文賞を受賞。(2009.9.18)

■電子情報通信学会MVE賞受賞

成ヨニア(苗村研・D2)が、電子情報通信学会マルチメディア・仮想環境基礎研究会において「匂い情報を手掛かりにしたライフログシステムにおけるイベント検出手法の基礎検討」と題した発表を行い、MVE(Multimedia and Virtual Environment)賞を受賞。(2009.11.12)

■NHKデジタル・スタジアム入選

佐々木遊太(教育部研究生・2年)制作のアニメーション「ゴミのつがい」がNHKデジタル・スタジアム第370回にて箭内道彦セレクションに入選し、11月28日、放送された。同じく「東京のフォホー」が同372回にて丹下紘希セレクションに入選し、12月20日、放送された。

■学術映像博2009・学術映像コンペティション入選

佐々木正人研究室が製作した映像データベース「動くあかちゃん事典」が、学術映像博2009・学術映像コンペティション(京都大学総合博物館主催)に入選し、京都大学で授賞式典が行なわれた。当日は受賞作品上映会も行なわれ、宇宙物理や人類学、地震工学など様々な分野と映像をキーワードにした学際的交流が行なわれた。(2009.12.10)

Book



『新訂 新聞学』

浜田純一・桂敬一・田島泰彦編 / 日本評論社

急速なデジタル技術の発展・普及のなかで、危機に直面する新聞の実態と対応を総点検し、ジャーナリズムの可能性を追求する書。新聞を通して「メディア学」の基本を体系的に学ぶ。執筆者は、浜田純一・東大総長、水越伸教授、林香里教授ほか。

『メディアリテラシー・ワークショップ —— 情報社会を学ぶ、遊ぶ、表現する』

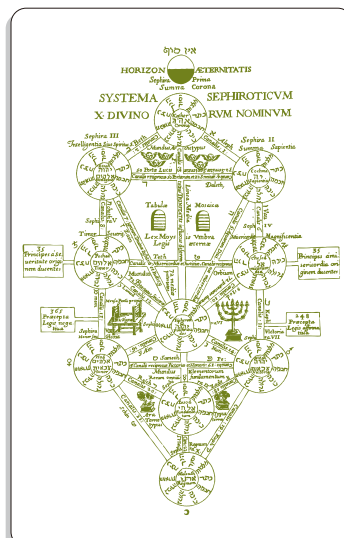
水越伸・東京大学情報学環メルプロジェクト編 / 東京大学出版会

メディアに覚醒し、情報社会の未来をデザインするために——18のワークショップを通し、メディアリテラシーを“体感して身につける”方法を解説。必要な道具など実践の手引きも収録。メディアで表現したい人、教育関係者、マスメディア、市民メディアほかすべての人に役立つ1冊。



Cover

表紙モチーフについて



協力:阿部卓也(学際情報学環OB)

ユダヤ神秘主義思想カバラの「セフィロトの樹」。ただし図は17世紀のA.キルヒャーによるエジプト研究書「エジプトのオイデイプス」に描かれたもの。カバラは古代から中世にヘブライ語聖書の読解術として始まったが、そこで発展したテキストの暗号化と解読、結合術、諸言語の祖語の探求、言語の先行性といったアイデアはコンピュータにまで至る完全言語追求の系譜に決定的な影響を与えていく。

address: 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

e-mail: news@iii.u-tokyo.ac.jp

the member of editorial board: 柳原 大・林 香里・前波奈保子・大久保 遼

editor's note:

ニュースレター編集員になって間もないある日、本部の会議に行ったとき、各部局のニュースレターがズラリと並ぶラックを発見。なるほど、部局の印刷物はこんなにたくさんあるんだとびっくり。よし、この中からまず一番に手にとってもらえるものをつくろう、と誓って早5年。新人だった私は、いつのまにか、編集会議のお局様になっています。

せっかくだから読んで捨てるだけじゃもったいない、とメディアのワンソース・マルチアウトレットも実践。一昨年は本ニュースレターのユニークな表紙をポストカード化。

さて、今年は学環創立10周年。記念に、こんどはニュースレターで特集した先生をプロマイドカードにしてみようか、なんて話も出てます?!? (林香里)

Interfaculty Initiative in Information Studies
Graduate School of Interdisciplinary Information Studies
The University of Tokyo

<http://www.iii.u-tokyo.ac.jp/>

.28

02. 2010



35
Principes am
sericordia ori
ginem ducentes

248
Præcepta
Legis affirma
tiua

Elementorum
fundamentum

Regnum
ra. X.

Regnum